機動戦士ガンダム　終戦前夜のブリュンヒルト

雪宮鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダム　終戦前夜のブリュンヒルト

【Ｎコード】
Ｎ４２９２Ｊ

【作者名】
雪宮鉄馬

【あらすじ】
一年戦争の終戦間際、ア・バオア・クーに展開するジオン軍の中で一つの計画が実行されようとしていた。それは、本土決戦を避けるための大きな賭けだった……。
本作は「機動戦士ガンダム」をベースに一年戦争終結前夜の事件をオリジナルストーリーとして執筆した短編小説です。

（前書き）

初の、ファンフィクションです。
ガンダムのファンの方も、そうじゃない方も読んでいただけたら嬉しく思います。

漆黒の闇が、眼前に広がる。その闇の端々には、宝石のようなきらめきを持った光がきらめき、時折瞬いてはその姿を消していく。それが、星でないことは一目瞭然であった。爆音も衝撃も、振動さえ伝わらない真空の空間で散っていく光。それを「生命のきらめき」と呼んだのは一体誰だったのか。

レイノ・アルケー大佐は、チベ級戦艦の舷窓から、広がる宇宙空間を見つめていた。音のない世界では、目の前にある世界が今、戦場と化しているリアリティさえも伝わってこない。しかし、敵味方のビーム光や、爆発の光は、間違いなくそこが決戦の地であることを示していた。

今、まさにレイノの祖国である、ジオン公国は滅亡の危機を迎えていた。地球連邦軍の艦隊は、宇宙要塞「ア・バオア・クー」の目と鼻の先にまで迫っている。連邦軍は「カス」などではない。その圧倒的な物量にものを言わせ、遅れた兵器開発、特にモビルスーツの開発において、彼岸の差を埋めても有り余る戦力で、押し迫ってきたのだ。この巨大要塞を陥落させれば、ジオン本国がある、スペースコロニー群「サイド3」にまで戦火が及ぶのも、時間の問題だろう。そうして、一年間に及ぶ「ジオン独立戦争」は、ジオン公国の敗北という形で終結する。

戦争というのはとても罪深い。宣戦布告したジオン公国も、戦争を焚き付けた地球連邦軍も、皆罪を背負わなければならない。一体この戦争でどれだけの人間が死んでいっただろう。敵も、味方もない。多くの兵士がその命を失った。しかし、それにも増して罪深いのは、ジオンである。戦争が始まるや否や、スペースコロニーの一つに毒ガスを撒き、住民を皆殺しにしたうえで、そのコロニーを地球へと投下した。地球に住む三分の二以上の一般市民が死滅し、地球環境は壊滅的となった。それは、人間の行いと呼ぶにはあまりに

も残酷すぎる「暴挙」であると、レイノは思う。
確かに、地球連邦軍は宇宙市民（スペース・ノイド）に対して圧制を敷いた。その事実を多くの地球市民（アース・ノイド）は知りもしないだろう。そのことを罪と呼んだとしても、それが死に値することとは、到底思えない。しかし、戦争は始まり、多くの同僚たちは、この戦争に何の疑問も抱かず、戦い、そして散っていった。それを、自分勝手に「無駄死に」「罪の上塗り」だと言うことは出来ない。
そう思えば思うほど、レイノの決断は鈍る。このまま、決断を下していいのだろうか……。舷窓に映りこむ、壮年の皺が目立つ自分の顔を見つめながら、レイノは思った。
「レイノ・アルケー、第3技術部大佐殿っ、出発の準備が出来ました」
突然背後から呼ばれ、レイノは振り返った。そこには、ヘルメットを小脇に抱え、濃緑色のパイロットスーツに身を包んだ女性仕官がいた。模範的とでも言う敬礼をする、その女性仕官はとても若い。まだ二十歳（はたち）かそこらだろう。小柄で目鼻立ちのはっきりした、美人と呼ぶに相応しい女だった。
「君は……？」
「わたしは、第４０５哨戒中隊所属、リタ・ライコネン中尉でありますっ」
ライコネン。その名に、レイノは聞き覚えがあった。
「すると、君は、ライコネン中将の娘さんかね？」
「はいっ。ヘンリー・ライコネンはわたしの父です」
リタは敬礼の姿勢を崩さずに言った。ライコネン中将は、ジオン第５艦隊を指揮する司令官である。技術将校のレイノと言えども、何度かお目にかかったことがあるし、話をしたこともある。しかし、その将官に美しい娘がいることも、その娘が軍人であることも知らなかった。
「そうか、少将殿の娘さんか……。もしかして、君が私の護衛をしてくれるのかね？」

「はっ。そう命令を受けました。若輩ながら、大佐のお役に立って見せます」
軍人らしいその口調は、リタに似合わないと、レイノは思った。ライコネン中将は、誰が見ても軍人気質の人物だ。自らが、国家のために戦えることを誇りに思っているような人物だ。そう言う男の娘もまた、自らが兵士であることを誇りに思っているかのようだった。
「委細を知っているとは思うが。私の護衛につけば、祖国を、そしてお父上を裏切ることになる。これは、紛れもない反逆だ」
「リヒャルト閣下から聞き及んでおります。わたしは……、わたしはレイノ大佐たちのお考えに賛同しています。だから、此度の任務に志願しました」
どこまで本気かは分からない。この娘は、本当に反逆の罪を犯そうとしている自分の考えに、賛同しているのだろうか？　そんなレイノの疑いの眼差しを感じ取ったのか、リタは敬礼を解くと、先ほどまでレイノが見ていた舷窓の外を見つめた。
「ジオンはここで潰えます。しかし、わたしたちの犯した罪は、この宇宙世紀がどれだけの刻（とき）を刻んだとしても許されるものではありません。せめて、この戦争を早く終わらせて、未来に生まれるムンゾ（サイド3の別名）の子達に、少しでも汚名を雪（そそ）ぐ機会を残したいと、わたしは思っています」
「ジオン軍人の言う言葉ではないな……」
レイノが笑みを浮かべて言った。しかし、その笑みはリタに向けたものではない。むしろ、自分に向けたものだ。自分よりも、半分以上も年若いリタが、真剣な眼差しで未来を語る。それは、戦争の末期症状だと思う。それと同時に、そういう末期症状を作ったのは、レイノたち老骨の責任でもあった。思想、心情、利害、言葉にすればそれだけのことで、人類は地球と宇宙を二分して戦争を始め、その手を血で汚してきたのだ。まさに、リタの言うとおり、許されざる罪。

「軍人である前に、わたしも人の子ということです。例え、人類がニュータイプに目覚めたとしても、人間はどこまで行っても、人間です。だからこそ、わたしは正しいと思えることをしたい。それが、レイノ大佐たちのお考えと同じと言うことなのです」
「贖罪か。この作戦が、果たして君の言うような贖罪になるか、それは誰にも分からんぞ」
「それでも構いません。どうか、わたしを護衛としてお使いください」
リタは舷窓から目を離し、レイノに向かって深々と頭を下げた。リタの瞳は嘘などついてはいないように思えた。もしも、信用ならない人物であるならば、贖罪という言葉に笑わずにはいられないだろう。自分に賛同してくれる者は少なくない。こんな若い女兵士でさえ、自分のしようとしていることを「正しい」と言ってくれるのだ。今こそ、今だからこそ、決断を鈍らせるわけにはいかない……。
「よし、分かった。時間はないぞ、近衛師団が行動を起こす前に、我々は地球へ降下する。行くぞ、リタ中尉っ！！」
レイノはそう言うと、軍服の裾を翻した。向かう先は、艦の下部船倉にあるモビルスーツ・デッキである。

計画が持ち上がったのは、ほんの少し前、戦火の合間に行われた酒の席である。丁度その頃、地球に侵攻していた降下部隊が、オデッサ戦役、ジャブロー戦役と次々に敗退し宇宙へ舞い戻り、敵との戦力均衡が崩れ去ったことは、誰の目にも明らかであった。
それは即ち、ジオン公国の旗色が悪くなったと、言わざるを得なかった。
口火を切ったのは、近衛師団長のリヒャルト少将であった。リヒャルトは、身も心もジオニズム思想に心酔しているような人物であっただけに、その場に居合わせたレイノをはじめ将校たちは、思わず耳を疑った。
「ギレン・ザビを暗殺する」

ほとんど冗談にしか聞こえなかったが、その場に居合わせたものたちは、図らずとも心のどこかで、敗北というゴールのみしか見えない戦争に、埋没していく祖国を憂いていた。そして、この凄惨な戦いを終わらせることこそ、今を生きる自分たちに課せられた急務ではないか、そのように考えていた。

すぐさま、計画は具体性を帯び始めた。当初は、技術将校であるレイノを含めて、十人足らずの同志も、あっという間に、その倍以上の人数に膨れ上がった。それだけ、軍内部に、ザビ家のやり方に対する不満を持つものが大勢いたのかと、レイノは驚いた。しかし、当のレイノは、他の者たちとは少し考えが違う。反ザビ派というわけではなく、純粋に戦争の早期終結を構想していた。

リヒャルトの部下であり、計画遂行責任者となったヴォルフ大佐を中心にレイノたちは「戒厳下鎮圧計画書」と名づけられた計画書を仕上げた。これは、もしも本国および、それに類する場所で反乱が起きた場合、反乱の陳初のために、近衛師団のモビルスーツ隊が戒厳令を発布し、軍部の全権を近衛師団の指揮下に置くというものである。

この計画書は作成後、すぐに軍部により承認を受けた。しかし、軍部はこの計画の裏にある「もう一つの計画」の存在を知らなかった。リヒャルトたちは、この計画に乗じて、起きても居ない反乱を演出、全権掌握した近衛師団のモビルスーツ隊が、ギレン・ザビを乗艦ごと破壊しようと考えていた。

その一方で大事なのは、ギレン・ザビの戦死だけではない。戦争を終結させるための工作が必要であった。ギレン・ザビが死んでも、その地位は妹であるキシリア・ザビが引き継ぐだけである。そうなる前に、全権を近衛師団が掌握している間に、連邦軍側に無条件降伏の申し入れをしなければならない。その任務には、技術将校のレイノが選ばれた。

レイノは計画に参加した唯一の技術将校であった。しかし、それ以前に、レイノの存在はリヒャルトたちにとって、非常に重要だっ

た。こちら側から連邦政府に降伏を申し入れるに当たって、手土産は必要不可欠であった。圧倒的に優勢である連邦側は、ギレンの首一つでは納得はしないだろう。禍根を残さないためにも、本国上陸は避けられない。そうならないための、手土産に選ばれたのは、第２技術部が開発した、とある技術である。そして、交渉の席にこれを持っていくのは、技術将校であり交渉術の心得があるレイノが適任と誰もが考えていた。

失敗の許されないこの計画は十分な準備を行って、実行に移行する予定であった。しかし、連邦軍の進軍速度は予想を上回っていた。宇宙世紀７９年の暮れには、ソロモン要塞を陥落させた連邦艦隊は、次なる拠点、ア・バオア・クー要塞にまで駒を進めてきた。ここを攻め落とされれば、ジオン本国は目の前となる。

もうどれほどの猶予もない。計画はすぐにでも実行されなければならないと、同志たちの焦りが顔にありありと浮かんでいた。

「我々の計画は綿密だ。事態の切迫を鑑みれば、実行は今しかない！」

レイノは誰かが計画を渋り始める前に、計画実行をリヒャルトに進言した。計画のリーダーであるリヒャルトは、すぐさま実行を命じた。

実行の日は「１２月３１日」。作戦名は……。

モビルスーツ格納庫に降りたレイノは、エレベーターの手前で、更衣室へと案内され、ノーマルスーツに着替えさせられた。出撃準備のデッキは、真空状態でありそのままの格好で出るわけには行かない。普段あまり来たことのない、ごてごてとした宇宙服は、着込むまでに時間がかかった。

更衣室の手前で待っていたリタを従えて、モビルスーツ・デッキへと向かう。そこには、コムサイ型の内火艇（ランチ）とモビルスーツがあった。推し量るまでもなく、リヒャルトから、レイノとリタに用意されたものだろう。

「このモビルスーツは……」
レイノは、淡いパープルに染め上げられたそのモビルスーツを見上げて呟いた。１８メートルという巨躯を更に大きく見せるほどの、重モビルスーツ。腰部スラスターのために大きく取られたスカートと、広口のベルボトムを思わせる脚部。何より特徴的なのは、十字に切られたモノアイレールだ。
「ＭＳ－０９Ｒ－Ｂ　リックドム・バックラーです。リヒャルト少将閣下が、大佐の護衛のために、リタ中尉に預けられました」
傍らのメカニックマンが、レイノに説明する。しかし、レイノの視線は、バックラーと名づけられたモビルスーツに釘付けであった。
外観は、試作ジェネレーターパックを兼ねたランドセルを背負っている以外に、他のドム・タイプとそれほど差異はない。しかし、その両腕には六角形を二つに分けたようなシールドを備えていた。シールドからは、チューブのような、サプライヤー・ケーブルが出ており、それが肩の後ろから、ランドセルへと繋がっている。
「随分と、大仰な名前をもらったものだな……」
「はい？　大佐、何か仰られましたか？」
ヘルメットバイザーの向こうで、メカニックマンが怪訝な顔をする。レイノは苦笑しながら、メカニックマンに「なんでもない」と言った。
なんでもないことはない。このモビルスーツがもつ、シールドシステムを開発したのは、ほかならぬ自分なのだ。おそらく、リヒャルトはそれを分かった上で、レイノの護衛のためにドム・バックラーを用意したのだろう……。
もう一度、ドム・バックラーを見上げると、丁度リタが腹部にあるコクピットに乗り込むところであった。レイノが「よろしく頼む」と右手で合図を送ると、リタは少しだけ笑顔になって敬礼した。
「レイノ大佐、こちらです」
メカニックマンの案内に従い、ランチに乗り込むとすでに、ランチのパイロットが発進の準備を行っていた。パイロットは、操縦席

に入ってきたレイノに気付くと、作業をやめて座席から立ち上がり、敬礼をした。
「わたくし、ロブ軍曹でありますっ」
「レイノ・アルケーだ。よろしく頼むぞ」
レイノは敬礼を返し、ロブに作業の続行を進めると、自らは操縦席の隣に据え付けられた助手席に腰掛けた。
ロブ軍曹は随分と長身の男であった。本来、モビルスーツ・パイロット志望であったが、背丈があまりにも大きく、狭い濃くピットでは窮屈になりすぎるため、ランチの操縦士に転向したのだと、発進作業を進めながらレイノに語った。
「まあ、そのおかげで、この名誉ある任務に、リヒャルト閣下自らご指名いただいたわけですがね」
「名誉あるかどうかは、分からんぞ。私たちが無事、連邦の艦隊までたどり着き、これを差し出すまで、この作戦は反逆だ。無論、失敗すれば、我々の名は永久に反逆者として刻まれることになる」
ノーマルスーツの脇にあるポシェットから、レイノは一枚のディスクを取り出した。何の変哲もない、データを収めるためのディスクである。しかし、その中に記されているのは、レイノが技術将校として心血を注いだ、ある重要な技術がつまっている。
「お任せください、大佐。もっとも過酷な、戦域を突破するのに、このランチの推力ではいささか不安もありますが、必ず突破して連邦の旗艦まで、大佐を送り届けて見せます」
ロブは自信たっぷりに言った。己の力量を過信も、過小もして欲しくはない。しかし、作戦を決行するに当たって、ロブのような自信のあるパイロットは適任といえるだろう。
『こちら、リタ・ライコネン。出撃準備整いました』
ドム・バックラーに乗り込んだ、リタからの通信が舞い込んでくる。それとほぼ同時に、外線を知らせる電子音が　操縦席に鳴り響いた。ロブが通信のスイッチを入れると、窓ガラスの裏面にあるモニタに、小さなウィンドウが開き、そこにリヒャルトの顔が映し出

された。
『こちら、リヒャルト少将』
と、名乗るリヒャルトの後ろに映るオブジェから、リヒャルトは作戦本部を設置した、本国にある近衛師団本部にいるようだった。
『諸君、準備はいいかね？　これより、近衛師団は戒厳下鎮圧命令を発令する。ベルヒルト大尉率いるモビルスーツ隊は、ギレンの座乗する予定のグワジンを襲撃。目標は、ギレン・ザビのみ。確実にしとめてもらいたい。レイノ大佐は、直ちに連邦艦隊司令に接触してもらいたい。大佐……君が無事連邦軍に接触できるかどうかが、この苦戦の鍵だ。頼んだぞ』
「了解しました」
レイノが答えると、リヒャルトは懐から懐中時計を取り出した。レイノとロブも、ノーマルスーツに取り付けられた腕時計のつまみを握る。
『よし、それでは、時刻合わせ、5、4、3、2、1……ブリュンヒルト作戦発動っ！！　諸君の健闘を祈る』
リヒャルトの掛け声とともに、作戦は始まった。ランチは、コンベアによって、カタパルトデッキに運搬される。他の母艦に比べ短い、カタパルト台の先端にはランプが取り付けられていた。
『進路オールグリーン。ランチ、発艦よろし。ご武運を！』
管制室からの声。ランプの色が赤から緑へと変わる。発進の合図だ。
「ランチ発進しますっ！！」
ロブが操縦桿を倒すと、カタパルト台が火を噴いた。レイノの体に、思わぬ圧力がかかる。そして、一瞬の後には、レイノを乗せたランチは宇宙空間へと投げ出されていた。
もはや引き返す術はない。窓の外に広がる宇宙空間を見つめながら、レイノは思った。
チベのモビルスーツデッキを発艦したランチは、やや後方にリタのドム・バックラーを従えて、真っ直ぐに戦場へと向かった。ビー

ムの輝きが往来する戦場、その向こうに目指す連邦軍の旗艦がある。
レイノを乗せたランチは、戦場の真ん中を突っ切る必要があった。
「戦闘宙域に入ると、ミノフスキー粒子散布濃度が高くなります。リタ機との通信は、ほぼ不可能となるでしょう……」
操縦桿を握り締めたロブが言った。
「中尉の腕前は、どれほどなのか。軍曹は知っているのか？」
「いえ、詳しいことは。なにせ、私はずっとランチ乗りですから。でも、あの歳で中尉と言うからには、コネクションだけじゃなく、それ相応のものなのでしょう」
どうやら、ロブはリタがライコネン中将の娘であることを知っているらしい。
「軍曹。リタ機との回線を開いてくれ」
「はっ、ただいま」
レイノの命令に従って、ロブはコンソールパネルを叩く。すると、発艦前にリヒャルトを映し出していたウィンドウに、今度はリタが現れた。その顔は、いささかも緊張していない様子であった。
「中尉。これより、我々は戦闘宙域に突入する。誰にも発見されず、連邦艦隊に接近することは難しいだろう。問題となるのは、連邦軍機だけではない。味方のモビルスーツもだ。しかし、留まっている時間はない。近衛師団が全権掌握をする、数時間のうちに突破できなければ、この作戦は失敗する」
『承知しています』
「うむ。では聞いてくれ。現段階において、我々は反逆の徒だ。ジオン共和国国民であっても、ジオン公国軍属だという考えは捨てるんだ」
『つまり、それは、、わたしたちが発見されしだい、それが敵であれ味方であれ撃墜しても良いということですね？』
「そうだ。作戦の完遂は、講和への一歩だ。そのための多少の犠牲はやむをえない。頼んだぞ」
『アイ・コピー……命令として受け取ります』

画面の中のリタが、右手を操縦桿から離して敬礼をする。味方をも討てとは、あまりにも非情な命令であるにもかかわらず、リタの顔色は冷静そのものだった。
「大佐。モビルスーツのお出ましです」
ロブが前方を指さす。戦闘宙域の真っ只中より、光点が三つこちらに向かって飛来している。電探モニターにも、しっかりと三機のモビルスーツ接近を知らせるマーキングが表れていた。
「頼んだぞ、リタ中尉」
レイノは念を押すように、もう一度言った。リタはコクリと頷き、通信回線を遮断する。
「あれは……連邦の量産型ですね」
ロブの言の通り、接近してくる機影は、連邦軍のモビルスーツ隊である。ジムと呼ばれる、量産機であり、そのスペックはジオンの量産機を上回る。それに加えて、ジムの装備するビームガンは、収束力こそ弱いものの威力としては脅威と言わざるを得ない。
「停船命令です」
ランチの操縦席にあるメッセージボードに、連邦軍からの通告が表示される。
『不明船ニ告グ。直チニ機関ヲ停止シ、当方ニ従エ』
無論、従う意思など、レイノたちにはない。レイノは、ロブに突破を支持した。すぐさま、連邦軍のモビルスーツはフォーメーションを組み、こちらに向かってビームガンを構えた。
リタはそれを確認する前に、ドム・バックラーの腰にあるマウント・ラッチに据え付けられた、バズーカを取り出し担いだ。増加弾倉により、装弾数は倍になっているが、この先の戦闘を考えれば、無駄撃ちは出来ない。相手を仕留めるのなら、一発で命中させなければならない。
ランチを取り囲むように展開した、ジム部隊の軌道を予測し、リタはドム・バックラーのバーニアを吹かす。そして、敵をロックすると同時に、バズーカのトリガーを引いた。

命中。砲撃を受けたジムは、まるで内部から破裂するように光に包まれる。しかし、ここは真空の宇宙。あっという間に光は収束して消え、そこには微塵に砕かれた、無残なモビルスーツの遺骸だけが残された。しかし、敵はまだ二機残存している。

リタは機体を反転させた。その瞬間、側面から残存機のうち一機が、ビームーベルを引き抜いて突撃を仕掛けてくる。粒子の刃は真っ直ぐに、リタを捉えていた。

ジム特有のゴーグル型をした頭部が迫ってくる。しかし、リタはコクピットの中で非常に冷静であった。ドムの胸部に取り付けられている投光機を作動させ、まばゆい光を敵に浴びせかける。これで敵機のモニターは、数秒間ブラックアウトする。その隙を、リタは見逃さない。バズーカから手を離すと、背部ラッチの、ヒートセイバーを引き抜いた。そして、敵機のコクピットだけを狙いすまして、貫く。ジムのパイロットは、わけも分からないうちに黒焦げになっているだろう。

すかさずリタは、セイバーの刺さったジムを蹴り飛ばすと、その反動をそのまま利用し、質量移動制動（ＡＭＢＡＣ）だけで、残されたもう一機に接近した。そして、慌てふためく間も与えず、薙ぎ払う。ジムは、丁度コクピットのあたりで、上半身と下半身が泣き別れとなってしまう。

「すごい……！」

ランチを走らせながら、ロブはリタの戦いぶりに舌を巻いた。目にも止まらぬほどの速さで三機のモビルスーツを葬り去った腕前は、賞賛に値する。なるほど、リヒャルトが計画の要であるレイノの護衛に、リタを就けさせた意味がよく分かる。

「まだ油断は出来ないぞ。我々は、これから前線の真ん中に突入するのだからな」

レイノの忠告は的確であった。三機の連邦モビルスーツは、接敵と同時に、本隊への通信を送っているはずである。「未確認のジオン船を発見」と。その後それらとの通信が途絶えれば、連邦側は不

審に思うこと受けあいだ。
「必ず、これを連邦に届けなければ……」
レイノは、ノーマルスーツポシェットのあたりを探り、中にあるディスクの形を確かめた。

人類が宇宙に進出したことにより、そのあらゆる感性が研ぎ澄まされた者たちのことを、人類の革新「ニュータイプ」と呼んだ。そして、このニュータイプをより戦闘特化させるための研究こそ、技術将校としてのレイノに課せられた使命であった。ニュータイプの研究それ自体は、フラナガン機関と呼ばれる場所で行われていたことを考えれば、レイノの研究はそれと平行しながらも、まったく密接ではない別の研究であった。即ち、レイノの研究のテーマは「戦闘機械」としての「ニュータイプ」を「生産」することである。

元来、レイノは生物学の研究者として、ジオン軍技術部に仕官したわけではない。兵器研究、特にモビルスーツの兵装開発において、その手腕を発揮するためであった。しかし、彼の兵器研究に対する洞察力の鋭さから、専門分野ではない生物学研究の部署に異動させられることとなった。辞令をもらった時には、疑問も湧いたが、実際に研究チームのメンバーと、研究をはじめると、その研究内容は兵器開発に通じるものがあることが分かった。

そうして、完成したものこそ、通称「第二世代ニュータイプ」であった。ニュータイプの感性や第六感といった精神的なリードを、戦闘特化した新人類の生産のため、その遺伝子レベルから調整を行う方法、そして機器。これらの開発データはすべて、レイノの持っているディスクの中に収められている。

一方の連邦軍においても、ニュータイプの戦闘における優位性については、一部の人たちによって研究されていた。しかし、その技術水準はジオンのそれを圧倒的に下回る。それは、そもそも、連邦軍内にニュータイプの存在をまやかしと信じる固着した頭脳があふれていたからである。

しかし、ニュータイプの能力を極限まで戦闘に特化させた新人類を、自らの手で作り出せるとすれば、それは連邦軍にとって喉から手が出るほど入手したい技術ではないだろうか。

リヒャルトは、早期講和のカードとして、レイノたち研究チームの技術に目をつけた。実の所を言えば、リタがやってくるまで、レイノが作戦決行の決断を鈍らせていた理由もそこにあった。

もしも、この技術を連邦が使用すれば、生まれ出でる新たな生命は「戦闘機械」である。それは、新たな戦火を生み、戦うことしか知らない作られた人間は、殺戮を繰り返すだけ……。はたして、それが正しいことであるのか、と問われれば、レイノには答えようがなかった。

戦争を終わらせるために、戦争のための技術を渡す。それほど罪深いことはないのではないか……。

レイノたちがチベがら出発して、一時間が過ぎた頃。戦場から見れば裏手となる、ア・バオア・クーの背後で、ムサイ級戦艦が二隻轟沈した。戦場からは遠く離れており、流れ弾の命中や、連邦軍の接近が原因ではない。では、なぜ、突然にムサイは爆発したのか？

それこそがリヒャルトたちが演出する反乱である。

正体不明の爆発についての通達は、すぐさま総帥府と近衛師団に渡った。これをもって、師団長であるリヒャルトは、「戒厳下鎮圧令」を発動した。総帥府をはじめ、ジオンの各省庁は右往左往する中で、ムサイ爆発の首謀者が、反乱を鎮圧するべき近衛師団の手によるものだとは、想像もしなかった。

偽の反乱鎮圧を装った近衛師団のモビルスーツ隊は、リヒャルトの子飼いでもある、ベルヒルト大尉に率いられ、近衛師団ザンジバル級戦艦より出動した。狙うのは、居もしないクーデター犯ではない。ア・バオア・クーの前面に展開する艦隊の中。一際赤く染め上げられた、旗艦グワジン。それに座乗する、ジオン総帥「ギレン・ザビ」である。

一方で、リヒャルトたち本国に残っている同志たちは、全権掌握の特権を生かして、全省庁を指揮下に入れて、ギレン近習であり総帥府宣伝局長官でもある、メッケルを反乱の首謀者に仕立て上げ、彼を逮捕するため、総帥府へと向かっていた。

こうして、ブリュンヒルト作戦は、連邦との交渉役であるレイノ、ギレンを暗殺するベルヒルト、省庁を押さえ込むリヒャルトという、三つの軸が同時進行で進むこととなった。

その一軸である、ベルヒルト隊は爆発したムサイの方ではなく、ア・バオア・クーを横目に真っ直ぐ、グワジンを目指した。グワジンの周りには十隻以上の軍艦が浮かんでいるが、それには目もくれない。高機動型（R－2）ザクのスラスターを全開にして、ジオン親衛隊（SS）のモビルスーツ群を抜き去って、グワジンの艦橋をジャイアント・バズの射程に入れる。

「消え去れっ、ジオンに巣食う魔物めっ」

ベルヒルトはかけ声とともに、トリガーを引いた。発射されたロケット弾は、目標直前でいくつもの子弾に分裂し、グワジンの艦橋に襲い掛かった。無数の礫（つぶて）と化した弾丸は、グワジンの装甲を破り、窓ガラスを割って、艦橋を爆炎に包み込んだ。たとえ、ノーマルスーツを着用していても、艦橋にいるギレン・ザビは生きていないだろう……。ベルヒルトは破裂していくグワジンを見つめて確信した。

一方で、周囲に散開する親衛隊の艦船やモビルスーツへも、同時に僚機が攻撃を仕掛けた。まるで連鎖爆発が起こるかのように、親衛隊の船やモビルスーツが光に包まれる。しかし、留まって戦闘を繰り返すわけには行かない。ベルヒルトたちは、あらかたの目標を潰すと、踵を返してザンジバルの元へと帰還の途に着いた。

その途中、ベルヒルトはリヒャルトに「任務達成。ギレン・ザビ死亡」の一報を送った。

「大佐、やりましたっ！　ベルヒルト大尉がギレンを討ちましたっ」

リヒャルトを通して、ベルヒルトの通信はレイノたちのランチへ

と届けられた。
「首尾は上々か。我々も急ごう」
嬉々とするロブに、レイノは命じた。すでに、ランチは戦場の中にいた。右から左からビームや弾丸が飛来してくる。それらは、どの方角からどのタイミングで迫ってくるか分からない。一歩間違えば、そこに待っているのは死。剣林弾雨の真っ只中を突き進むと言うのは、死と隣り合わせのタイトロープを渡るのとなんら変わりがなかった。
しかし、リタの腕前も確かであったが、ロブの操縦桿さばきもなかなかのものであった。二人の協力なしでは、今頃ベルヒルトの報せを聞くこともなかっただろう、と思うと妙にゾッとしてしまう。
「また、モビルスーツが接近してきますっ！！」
ロブの報告が早いか、リタは間髪いれずに接近する敵機に向かって、バズーカを放った。リタの予測射撃は的確で、敵モビルスーツの動きを完全に読みきっている。距離にしてみれば、十分回避可能な距離であるにもかかわらず、敵モビルスーツは吸い寄せられるように、弾丸に命中した。
リタはニュータイプなのかもしれない。レイノはふとそんなことを思った。リタの才能を見ていると、自分が心血を注いだ「第二世代ニュータイプ」の研究など、児戯に思えてくる。
そんなレイノの自嘲を知ることのないリタは、黙々と接近する敵に対して攻撃を仕掛けた。幸いにも、ここに至るまで、味方のモビルスーツに襲われてはいない。すでに、ベルヒルトは行動を起こした。しかし、クーデターの情報は、混乱のために前線にまで行き届いていないのだろう。戦場を突っ切るランチと一機の試作モビルスーツを不審に思いながらも、襲撃することはなかった。
「左舷八時方向っ、敵機接近っ！！」
ロブがランチを滑らせる。ランチの丁度左後方より、ジムの部隊がこちらに向かってくる。リタはランチの後ろに付いて、バズーカを唸らせた。たった一発の砲撃で、敵モビルスーツは連爆を起こし

て塵となる。残りは三発。道程は半分以上進んだものの、予想以上に弾丸を消費してしまった。しかし、ランチへ無闇に敵を近づけさせるわけには行かない。そのためには、バズーカの使用は止むを得なかった。

節約しなくては……、リタはモニターの残弾表示を睨みつけた。その時である。コクピット内にけたたましい警告音が鳴り響く。新たな敵の接近を報せる電子音である。先ほどの部隊とは別の方角から、しかもものすごいスピードで接近してくる機影は、たった一機。リタはモニターの倍率を上げてみた。

通常モビルスーツは三機の編隊を一小隊とし、必ず一小隊単位以上で行動する。これは、ジオン軍であっても、連邦軍であっても同様であった。しかし、今、リタの前に姿を現したモビルスーツは、たった一機である。それが、普通のモビルスーツであれば、リタも冷静に対処できたであろう。しかし、そのモビルスーツは、普通ではなかった。

「し、白い悪魔っ！！」

そう唸ったのは、ランチのレイノの方が先だった。

連邦の白い悪魔……。その名はガンダムという。兵器開発で遅れをとった連邦軍が、大戦中期に開発したモビルスーツである。特徴的な白い装甲、二つの瞳、突き出した角のようなアンテナ。その兵器としては異形ともいえるいでたちのモビルスーツは、地球の各地でジオン兵を追い込んだ。まさに、ジオン軍にとっては「悪魔」以外の何者でもなかった。

「くっ、このタイミングで……！」

レイノは歯噛みした。よもや、ガンダムという悪魔に乗り込むパイロットが、十六かそこらの少年兵であることを、誰も知りはしない。いや、もしも、知っていたとしても「白い悪魔の戦場伝説」の通りであるならば、相手が少年であるかどうかと言うことよりも、最悪の相手と出会ってしまったことの方が、重要な事実であった。

「リタ中尉、戦闘は回避しろ。一気に駆け抜けて、白い悪魔の追撃

を逃れるぞっ！！」
　レイノは、通信のスイッチを入れて、リタに命じた。
『駄目……す。白……魔は、こちらに気付……います。……から逃れる……出来ませんっ』
　通信障害を引き起こすミノフスキー粒子の所為で、リタからの通信は鮮明ではなかったが、どうやらレイノの命令を聞く意思はないようだった。
　悪魔に魅入られたものは、その魔手から逃れられない……。かつて、ガンダムを目撃した兵士から聞いた話しである。もはや目の前に迫る、ガンダムは我々を目標に入れている。この場から生き残るには、リタの腕を信じるほかないことをレイノは悟り、迫り来るガンダムを睨みつけた。
　一方、リタは残りの弾丸すべてを撃ちつくす覚悟を決めた。ガンダムと交戦するのはこれが初めてだ。レイノたちには言っていないが、リタの実戦経験はほんの数時間ほど前に始まった。そう、リヒャルトによって、この任務が与えられるまで、一度も戦線に出たことがなかった。その背後には、父であるライコネン中将の権威がちらついていた。
　自分の娘を戦場に出したくないと言う気持ちはよく分かるが、それでも自分は父の背中を見て軍人になった。息子が欲しかったと、ことあるごとに口にする父のために、役に立ちたい。自分は女だが、息子でなくて娘であっても良かったと、父に言ってもらいたい一心だった。しかし、その心は父には伝わらなかった。
　そうして、落胆の中で、今一度ジオンを俯瞰した。そして、父のことしか考えていない自分の姿と、祖国のために戦う人たちの違いに気付いた。命を賭ける意味も知らない自分に、戦争なんて出来はしない。それは、自らが兵士ではないと気付かされた一瞬であった。
　その時から、リタの眼に、息子が欲しかったとしか言わない父の姿は映らなくなった。今、自分がすべきことは何か。ジオンの兵士として出来ることは何なのか。それを模索するうちに、リヒャルト

の計画に参加し、そして、レイノの護衛に抜擢されたのである。
連邦の白い悪魔、ことガンダムを前に、リタは瞳を閉じてもう一度自分の心に問いかけた。今時分がすべきことは何か？　それは、レイノを護り、祖国の名誉を護ること……。
「目標、連邦の白い悪魔！　リタ・ライコネン。行きますっ！！」
リタは誰に言うでもなく叫ぶと、フットペダルを強く踏み込んだ。

リヒャルトが数人の部下を従えて、サイド3にある総帥府に乗り込んだとき、情報局の執務室には長官であるメッケルと、その側近アントン少尉の二人しかいなかった。
「メッケル長官。あなたを、ギレン総帥暗殺の首謀者として断定し、逮捕する！」
リヒャルトが言い放つと、メッケルの傍らにいるアントン少尉は腰に帯びた拳銃にすばやく手をやった。しかし、メッケルはアントンの行動を制止した。すでに自分には、リヒャルトの部下によって銃口を向けられているにもかかわらず、余裕の表情をしていることに、リヒャルトは訝しく思った。
「リヒャルト師団長。わが国の軍務逮捕権限は、憲兵隊とｓｓにのみ許された行為であることは、貴殿もご存知であろう？」
メッケルは、執務席から立ち上がると、両腕を後ろで組んでつかつかとリヒャルトの方に歩み寄った。
「今は、反乱鎮圧のため、憲兵隊もｓｓも近衛師団の指揮下だ。逮捕権は我々にある。大人しく、ご同道願いたい」
「さもなくば、射殺する……そういうことか。私も君たちと法律論について、論議を交わすつもりはない。しかし、反逆の徒を捕まえるのであれば、ご自身の両の手ではございませんかな？」
「何をぬけぬけと」
リヒャルトは、メッケルの蛇のような目つきを睨み返した。メッケルは、あいも変わらず余裕の顔つきで、
「まあいい。リヒャルト師団長、私を逮捕する前に、ひとつ電話を

かけさせてもらえないか」
と言った。
「何処にかけるつもりだ？　助けなど来はしないぞ」
「フフフ。もっといいところだよ、師団長」
メッケルは意味深な笑顔を浮かべると、リヒャルトの了解も得ずに、背を向けて執務机の上にある電話を手にとった。メッケルの趣味で取り寄せた、ダイアル式の古風な電話機である。
「ああ、私だ、メッケルだ。つないでもらえないか？」
受話器に向かってそう言うと、メッケルは踵を返して、リヒャルトに受話器を差し出した。
「出たまえ、リヒャルト師団長。君が今一番会いたい人と繋がっている」
リヒャルトはメッケルから、恐る恐る受話器を受け取った。予感はあった。この部屋に入った時から。メッケルの余裕。そして、側近一人しかいない異様な執務室。
『やあ、リヒャルト君。……どうした、私の声を聞いて誰だか分からないのかね？　君が殺したいほど憎んだ、ギレン・ザビだよ。まったくもって、残念だ。君は、わが理想の一番の理解者だと思っていたんだがね……』
紛れもない……。その声はギレン・ザビその人の声だった。リヒャルトは愕然として、受話器を落とした。広い執務室に、カランと乾いた音が響き渡る。
「ギレン総帥は、ア・バオア・クーからグワジンには乗り込んでおられなかったのだよ。ムサイが爆発した時点で、グワジンへの乗艦を見合わせた」
メッケルは、リヒャルトの落とした受話器を拾い上げながら、事態を説明する。
「『戒厳下鎮圧令』。あれには軍議会を通過する前から反対でね、こうなることを予測していたと言えば嘘になるが、近衛の動向には常に眼を光らせていた。正解だったようだね、君たちに正確な情報

を伝えなくて。情報とは、常に新しいものを取り入れなければならない。君たちはそれを怠ったのだ。お粗末な結果で、とても残念だよ、リヒャルト師団長……ギレン閣下は生きておられる！」
「そんな、馬鹿な……」
リヒャルトは膝から崩れ落ちた。
「衛兵っ、近衛師団を逮捕しろっ！！」
メッケルは一際声を張り上げた。すると、潜んでいた総帥府の兵隊が雪崩を打って執務室へ飛び込んでくる。「武器を捨てろ」「両手を挙げろ」と口々に衛兵が叫ぶ中、リヒャルトはうつろな瞳で、腰のホルスターから拳銃を取り出した。
衛兵たちが止める前に、リヒャルトはその銃で自らのこめかみを打ち抜いた。銃声とリヒャルトの唸り声は、まるで断末魔の悲鳴のようであった。

「くっ、悪魔めっ！　速すぎるっ！！」
リタは、全身に重力を感じながら舌打ちをした。ガンダムの機動性は、データにあるものの数倍とも思われた。それでも、リタはガンダムの攻撃を紙一重で回避していく。
バズーカの弾丸はもう尽きてしまった。交戦開始の前に一発威嚇として撃った。その隙を突いて、ガンダムに接近したものの、ヒートセイバーはガンダムを捉えることは出来ない。ガンダムのパイロットは、場数を踏んでいるだけあって、頭部バルカン砲とビームライフルを使い分けながら、巧みにリタを追い詰めていく。何度も狙い済ましたが、撃ちこんだ残りニ発の弾丸も空しくそれていった。
どうすればいいのか。せめて、ガンダムの尻尾だけでも捉えることが出来れば、ランチを逃がすことが出来る。しかし、そのためには、一度でもいいから攻撃を浴びせかけなければならない。
『リタ中……、……聞け』
モニター画面の端に乱れた画像のレイノが映し出される。
「リタ中尉、よく聞け。ドム・バックラーに搭載された、シールド

を使用するんだ。敵の攻撃をこれで霍乱することが出来る。ただし、使用できるのは三回までだ。それ以上は、ドム本体のジェネレータが持たない」

リタはレイノの指示に従い、モニター画面にシールドシステムのマニュアルを開いた。シールドシステムとは、ドム・バックラーの両腕に搭載された白い盾のことである。

すぐにリタは、マニュアルにしたがって、シールドシステムを起動させる。すると、ドムの両腕が勝手に動き出し、両腕にそれぞれ取り付けられたシールドが一つになり、完全な六角形を描く。それは、ドムの巨躯を覆い隠すほどの、巨大なシールドだった。しかし、この盾はただの対ビームコーティング・シールドではない。

その真価はすぐに発揮された。

ガンダムのビームライフルが火を噴いて、真っ直ぐにリタの方へと伸びる。着弾のインパクトの直前、六角形の盾が、一瞬だけだかキラリと光った。そして、その次の瞬間、シールドに当たったはずのビーム弾はまったく同じ形で、今度はガンダムの方へと撥ね返す。

ガンダムのパイロットは一瞬たじろいだ。しかし、機敏に機体を回避させると、目標を失ったビーム弾はそのまま虚空で霧散した。

「これは……一体！？」

リタはシールドを構えながら呆然とした。敵の撃った弾が、そのまま、相手に跳ね返る。眼を疑うような光景だった。

通称「ビームリフレクター」。レイノが第3技術部に異動となる直前に開発した、特殊防衛システムである。シールドには、小型のビーム発振器が六つ取り付けられており、これらによって六角形全面に薄いビーム皮膜を構成する。皮膜に敵からのビーム粒子が当たった時、皮膜はこれを取り込むのだが、当然のように取り込んだ粒子の分量だけ、余剰粒子が発生する。これを再度、Ｉフィールド・コートしてやることによって、さも敵の攻撃を弾き返したかのように見えるのだ。

しかし、このビームリフレクターにも問題点がいくつもある。ま

ず、ビーム皮膜は薄いため、実体弾（普通の弾丸）に対してまったく防御力がない。また、ビーム皮膜で弾き返した余剰ビームには、収束力がないため、すぐにビーム粒子が四散する。それと同時に、弾き返す軌道を選ぶことは出来ない。そして、最大の問題点として、現用のジェネレーター出力では、フル稼働させて三回の使用が限度と言う点である。

これらの問題点を解決し、実用化に結びつけるつもりであったが、その前レイノは異動してしまった。しかし、その未完成兵器と言えども、今は強力な武器となる。

「押し込めーっ！！」

リタは叫ぶと、操縦桿を一気に倒して、シールドを構えたままガンダムに急接近した。危険を感じたガンダムはバルカン砲で牽制しながらリタを回避するが、やがてバルカンの弾丸が尽きてしまう。しかし、無闇にビームライフルを撃つことは出来ない。リタが持つ盾は光を反射する、鏡の盾のようなものなのだ。

ガンダムを至近距離に入れたリタは、六角形シールドを割ってヒートセイバーを繰り出した。セイバーの白熱化した刃は、ガンダムの直上を捉えていた。しかし、ガンダムもシールドを構える。激しい火花が散り。セイバーはガンダムの盾を抉った。

しかし、それ以上は刃を通さない。すると、ガンダムの構える銃口がシールドの隙間からチラリとのぞく。まずい！　リタは咄嗟に操縦桿を引き、ガンダムとの間合いを取る。シールドシステムを起動させ、六角形のビームリフレクターを形成する。ガンダムの放ったビームはまたもや、リフレクターによって弾き返された。

ガンダムは反射してきたビームをシールドで受け止める。収束力の弱いビームは、ガンダムのシールドに傷一つつけることはなかった。

「リタが善戦しているうちに、突破だ軍曹っ！！」

レイノがロブに命じる。しかし、命令を受けたロブの顔は真っ青であった。

「どうした、軍曹！？」
「ベ、ベルヒルト大尉からの通達です。『作戦は失敗。ギレン・ザビは生きている。繰り返す、作戦は失敗。ギレン・ザビは生きている』……」
「なんとっ！？　リヒャルト閣下はどうなされた！？」
つかみ掛かるような勢いで、レイノはロブに問いかけたが、ロブは頭を左右に振って「わかりません」とだけ答えた。
レイノは脱力して、背もたれにもたれかかった。
「やはり、作戦の実行は早計だったのか。いや……まだだ。これを連邦に届ければ、事態は変わる。リヒャルト閣下の生死がどうあれ、作戦はまだ終わってなどいないっ！！」
そう言って、再びレイノはポシェットからディスクを取り出した。作戦の三本柱のうち二本が倒れたとしても、総帥府やメッケルたちはまだ、レイノの存在に気付いていないだろう。それは、消えそうな一縷の望みにしがみつく思いだった。
ロブは強く頷くと、ランチのスラスターを全開にする。
その時である。何処からともなく、一条の光が流れ弾となって、ランチの横腹に迫ってきた。そうである、ここは戦場の真ん中なのだ。敵はガンダムだけではないのだ。しかし、ランチの小回りはそれほど機敏ではない。まるで、巨大な獲物に飛び掛ろうとする肉食獣よろしく、ビームはランチに食らい付く。一貫の終わりと見えたその刹那、リタのドムがリフレクターを構えてビームを遮った。しかし、それは同時に、ガンダムに対して背中を向けることとなってしまった。
絶対の好機。ガンダムのパイロットがそれを逃すはずなどない。戦場では敵に背を向けた方が負け。そんな当然の理屈が、リタの脳裏を過ぎった。激しい衝撃とともに、コクピット内に被弾を報せるメッセージが右往左往する。
「もう、リフレクターは使えない……」
リタは呟いた。ヒートセイバーは今の被弾で破損したらしく、画

面に表示された障害リストの一番に列記されていた。それは、武器がなくなってしまったことを意味していた。
『中尉……脱しろ。ここから……われだけで行く』
ミノフスキー粒子に邪魔された不鮮明な、レイノからの通信。リタは、ビームリフレクターを分解すると、ドムの腕を伸ばして、ランチの脇腹に接触させた。直接回線である。
『繰り返す、中尉離脱しろ。ここから先はわれわれだけで行く』
「いえ、そうは行きません。わたしには大佐をお護りするという任務があります。ですから、最後までお供させてください」
リタが言うと、しばらくの沈黙があった。
『リタ中尉。君はとても若い。今ここで、死んでは何もならない。リヒャルト閣下のブリュンヒルト作戦は失敗した……。ここからは、私の独断だ。その独断に、将来のある君を連れて行くわけには行かない。今なら、まだドムの残ったパワーで、ア・バオア・クーに帰還することが出来る』
「嫌です。わたしが将来ある身と仰られるのなら、大佐はわたしたちの将来を作ってくださるお方です。そして、わたしはそんな大佐をお護り出来ることを、誇りに思っています」
『そう言ってくれるのは、とても嬉しいことだが。中尉、君は帰還しろ。これは命令だ』
「その命令は履行できませんっ！！　大佐は、多少の犠牲は止むを得ないといいました。わたしは、ジオンの将来のために、犠牲になりますっ」
『馬鹿者っ！！』
レイノがそう叫ぶ前に、リタは通信を遮断した。一度ランチと距離をとったガンダムは、まだこちらを執拗に狙っている。リタは障害警告灯の点滅をすべてオフに切り替えると、機体をガンダムの方に向けた。もはや持てる武器はすべて使い果たした。しかし、もう一つだけガンダムを撃破するための武器がある。
「うわぁぁぁぁっ！！」

リタは腹の底から叫んだ。普段同僚から「感情表現が乏しい」と言われた自分にも、これほど激しい感情が眠っていたのだと驚く。
リタ機はそのままガンダムの方に向かって突進した。ガンダムはビームリフレクターの使用回数が、三回と限定されていることを知らない。無闇にビームライフルを撃つことが出来ないその隙を狙い、ガンダムの懐に入れば勝機が見えてくる。フットペダルを強く踏み込みながらも、左手でコンソールをつつく。構えた六角形のビームリフレクターに残されたすべてのエネルギーを注入するためだ。
「お願い、もう一度だけっ」
眼前にまで接近したガンダムの懐に滑り込むと、リタは祈りを込めて、リフレクターを起動した。その瞬間、ガンダムはこともあろうに、ビームライフルを手放した。そして、背中からビームサーベルを引き抜く。それが、リタの狙いであった。
ガンダムのサーベルはリフレクターを強く叩いたが、薄い皮膜によって阻まれてしまう。リフレクターの表面から、いくつもの針のような余剰ビームが飛び出すが、それらに貫通力などなく、ガンダムの強力な装甲を打ち破ることはない。
「リフレクター解除!!　大佐はわたしが護るっ!!　悪魔めっ、落ちろぉっ!!」
リタは憎らしい、連邦の白い悪魔の顔を睨みつけた。そして、ビームリフレクターのスイッチを切る。六角形の盾はその中心から分裂していく。一瞬ガンダムの動きが止まった。打ち据えたビームサーベルは盾の亀裂から、そのままドムの体を縦に切り裂いていく。互いのモニターディスプレイが真っ白になる。
その時になって、ガンダムのパイロットは、リタの隠し持ったもう一つの武器に気付いた。自爆。ガンダムのパイロットの脳裏にその二文字が浮かぶ。慌ててビームーベルから手を離すと、ドムを蹴り飛ばし、スラスターを吹かして爆発圏外へと脱出した。しかし、シールドの切れ目から覗く、赤いモノアイは逃げていくガンダムをずっと睨みつけていた。

そして、ビームーベルに貫かれたリタのドムは光に包まれた。激しい光。爆音も衝撃も、振動もない。ただ、まばゆい光だけが周囲を支配した……。

「生命のきらめき……」

レイノは爆発に包まれるリタのドムを見つめて呟いた。自分のために誰かが犠牲になることが、これほどまでに胸を締め付けるとは思わなかった。そして、目の前に広がる、リタの輝きは、まさに人の命が輝く最後の光のように思えた。

ロブはこの光を盾にして、一気にランチをガンダムから遠ざけた。どうやらガンダムは追尾を諦めたらしい。　しかし、ランチの中は沈痛な空気に包まれていた。リタの決死の思いがどれほどであったのか。はたして自分たちは、年若い彼女が命を賭けてまで、護られるべき存在なのか。そう思えば思うほど、リタの輝きが胸に刺さる。

「ブリュンヒルト……。その名は、地球の古い神話に登場する戦女神の名前ですよね」

ロブが沈んだ空気を嫌って、レイノに尋ねた。

「そうだ。リヒャルト閣下が命名された」

「まさにリタ中尉のことだったんですよ。われわれは、中尉に護られたんです。彼女こそ、私たちのブリュンヒルトです」

ロブの言葉に、レイノは頷いた。そして、もう一度だけリタの最期の場所を見つめた。もう光は収まっており、ここからでは、その残骸さえも見当たらない。

「ブリュンヒルトの護ってくれたこれは、必ず……」

ディスクを握り締めるレイノの瞳は、かすかに潤んでいた。

やがて、ランチの前に、連邦軍の主力艦隊が現れる。ランチは静かに、威容をたずさえた連邦艦隊へと接近して行った……。

ギレン・ザビのカリスマ性は非常に高かった。しかし、彼は人生のうちで事の大小にかかわらず、実に四十回近く、暗殺の憂き目にあっている。幸いであったのは、そのすべてが未遂事件に終わった

ことである。
　そんなギレン・ザビはこの数時間後、実の妹であるキシリア・ザビの手によって、「父親殺し」と罵られながらア・バオア・クーの司令室で銃殺された。そして、キシリア・ザビは要塞から脱出する前に、何者かの手によって暗殺されている。
　翌日、宇宙世紀００８０年一月一日、ジオン共和国は地球連邦軍と月面都市グラナダにて、講和条約を締結した。その背後に、ジオン軍将校のレイノ・アルケー大佐が連邦軍に持ち込んだ技術があったかどうかは、まったくもって定かではない。また、レイノ大佐と彼を連邦軍まで護送したロブ軍曹の、その後の行方は誰も知らない。

（後書き）

「あとがき」

最後までお読みいただいた皆様、どうもありがとうございます。
いかがだったでしょうか？　もし、楽しんでいただけたとしたら、とても幸いです。

書き終わった後で、似たようなネタの漫画があることを知り、愕然としています。素人の思いつくことは、プロはとっくに思いついてるってことなんでしょうか？
それでも、オリジナルのモビルスーツを出してみたり、ガンダムと戦わせて見たりと、ファンフィクションだから出来るネタを盛り込んでみました。
やれることは、まだありそうなので、反省を生かしながら、いつかまたガンダムのファンフィクションを書きたいな、などと愚かしくも思っています。その時は、またよろしくお願いいたします。

ご意見・ご感想などございましたら、お寄せください。

雪宮鉄馬　２０１０／１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4292j/

機動戦士ガンダム　終戦前夜のブリュンヒルト

2010年10月8日14時33分発行